蘇軾詩注解補（六）

西岡　淳
南山読蘇会

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

淮を過ぐ　三首。景山に贈り、兼ねて子由に寄す（〇九四八～〇九五〇）

余　金山を去って五年にして復た至る。旧詩の韻を次ぎて宝覚長老に贈る（〇九五二）

恵山に遊ぶ　并びに叙（〇九五四～〇九五六）

恵山の僧　恵表に贈る（〇九五七）

銭道人に贈る（〇九五八）

〇九四八～〇九五〇（施一六―三三～三五）

過淮三首贈景山兼寄子由

淮を過ぐ　三首。景山に贈り、兼ねて子由に寄す

〇九四八（施一六―三三）

その一

1　好在長淮水　　好在なり　長淮の水
2　十年三往來　　十年　三たび往来す
3　功名眞已矣　　功名　真に已んぬるかな
4　歸計亦悠哉　　帰計　亦た悠なる哉
5　今日風憐客　　今日　風　客を憐れみ
6　平時浪作堆　　平時　浪　堆を作す
7　晚來洪澤口　　晩に洪沢の口に来たれば

8　捍索響如雷　　捍索（かんさく）　響（ひび）くこと雷（らい）の如（ごと）し

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。南京（河南省商丘）を経て任地の湖州（浙江省）に向かう途上の作。

○景山　孫奕（そんえき）のこと。景山はその字。閩県（福建省）の人。「孫職方が「蒼梧山」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊四一〇頁）を参照。○子由　このとき蘇轍は、南京応天府において南京留守簽判の任に在った。「子瞻が淮を過ぎて寄せらるるに次韻し、兼ねて孫奕職方に次韻す　三首」（『欒城集』巻九）は、蘇轍がこの連作に唱和したもの。1○好在　元のままであること。本来は「好在なりや」と訓じて、健在であるかを問う意を表すことが多い。ここでは淮水を擬人化して、「相変わらずお元気ですね」と語りかけるニュアンス。「餘杭の法喜寺の寺後の緑野亭に宿して……」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二七五頁）を参照。一韓智翃は、「サテモ此ノ長淮水ノ水ハ、恙無（ク）シテ、イツモ同ジヤウニシテアルモノカナゾ」（『四河入海』巻一六の二）と記す。○長淮　遠くから流れてくる淮水。次の句に述べられるように、以前から蘇軾は淮水の流れに親しく、またその上流一帯についてもよく知っていた。2○十年一句　この時までに蘇軾が淮水を渡ったのは、熙寧四年（一〇七一）、杭州通判に任ぜられて都開封（河南省）から杭州（浙江省）へ向かったとき、熙寧七年（一〇七四）、知密州に任ぜられて杭州から密州（山東省）に向かったとき、そして徐州（江蘇省）から南京（河南省）を経て湖州（浙江省）に向かう今回の三度である。淮水は中国を南北に分かつ川であり、一句は蘇軾がその流れを何度も越えて、南北に旅するを余儀なくさせられたことをいう。3○功名功績と名声。○已矣　どうしようもない。もうだめだ。絶望のことば。「已矣夫」の形でも用いられる。『論語』子罕篇に、「鳳鳥至（ほうちょう）らず、河（か）図（と）を出ださず。吾れ已んぬるかな（吾已矣夫）」とある。4○帰計　故郷に帰り棲むための計画。○悠哉　悠は、はるかで遠いこと。『詩経』周頌（閔予小子（びんよしょうし）之什）「訪落（ほうらく）」に、「於乎（ああ）　悠なる哉、朕（われ）　未だ艾（つく）す有らず」とあり、鄭箋は「遠くして及ぶ可からざるを言うなり」と説く。7○洪沢口　淮水が洪沢湖に注ぐ河口。8○捍索一句　捍索は、船の舫（もや）い綱（づな）。航行の時は船端から垂らしておき、停泊の際には岸に、または他の船と繋ぎと

める。王注（趙堯卿）に「舟に捍索有り、行けば則ち舟より墜とし、住まれば則ち纜と為す」とある。一句は、その舫い綱が風に吹かれて強い音を響かせるのを、夜になって既に下船していた蘇軾が耳にしていることをいう。

遠くから流れてくる淮水の流れは相変わらず元気なようだ。思えば私はこの十年のあいだに三度、その流れを過ぎて北に行ったり南に来たりした。手柄や名声などはもはやどうでもよいというのに、郷里に帰休したいという思いも延々とまだ果たせずにいる

今日は風がやわらいで旅ゆく私を憐れんでくれるようだ。いつもは（風が強く吹いて）淮水も高い波をたてて流れているというのに。果たして夜になり洪沢湖にさしかかると、舫い綱が雷のような音をとどろかせている。

○九四九（施一六―三四）

その二

1　過淮山漸好　　淮を過ぐれば山は漸く好く

2　松檜亦蒼然　　松檜も亦た蒼然たり

3　靄靄藏孤寺　　靄靄として　孤寺　蔵る

4　泠泠出細泉　　泠泠として　細泉　出づ

5　故人眞吏隱　　故人　真に吏隱

6　小檻帶巖偏　　小檻　巖を帯って偏なり

7　却望臨淮市　　却って臨淮の市を望めば

8　東風語笑傳　　東風　語笑　伝う

2○松檜　檜は、和名ビャクシン。松柏の類で冬枯れしない。「硯山」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊二〇四頁）を参照。3○靄靄　草木の盛んに繁るさま。藹藹に同じ（藹藹に作るテキストがある）。4○泠泠　水の音の清らかなさま。また、水の清らかなさま。「荊門の張都官維の恵泉の詩に和せらるるに答うるに次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊一八六頁）を参照。5○吏隱　官職に在りながら名利や栄達にとらわれず、意を隠者のように保つ在り方のこと。宋之問「藍田の山荘」詩（『全唐詩』巻五一）に、「宦遊は吏隱に非ざるも、心事　幽偏を好む」とある。6○小檻一句　孫景山の住まいについて述べるが、『四河入海』

は「カケツクリ（崖造・懸造）」、すなわち傾斜地に張り出して造られたものと解する。一韓智翊は、「偏ナリト云（フ）ハ、居ノ岩ヲ遶（リ）テ、カケツクリニシテ偏居ナルヲ云（フ）ゾ。偏ハ、正デナイヲ云（フ）ゾ」と記す。偏の字には、俗世から遠い意も込められていよう。７８〇却望・東風二句　泗州には、臨淮・盱眙・招信の三県が置かれた（『太平寰宇記』巻一六）。ここでの臨淮は、泗州の城市をさす。二句について瑞渓周鳳は、「言フココロハ、孫景山ガ所居自リ是ノ臨淮ノ市ヲ望ム、則ンバ市人ノ笑語喧嘩ニシテ、其ノ声風ニ因リテ遠ク聞コユ。然レドモ景山ガ所居、独リ閑ナリ」と説く。

淮水を過ぎ（て南に来）ると山の緑がだんだんと美しくなり、松やヒノキも鬱蒼としている。木々にひっそりと覆われてたたずむ寺、そこからさらさらと流れ出るか細い泉の流れ。

わが友はまことに隠者さながらの役人で、岩に質素な手すりをめぐらせたその住まいにも、俗世から遠いおもむきがある。そこから振り返って泗州の街を見やれば、遠い市井のさざめきを東風が伝えてくれるのです。

〇九五〇（施一六―三五）

その三

1　回首睢陽幕　　首を回らす　睢陽の幕
2　簿書高没人　　簿書　高くして人を没せん
3　何時桐柏水　　何れの時か　桐柏の水
4　一洗庾公塵　　庾公の塵を一洗せん
5　此去漸佳境　　此より去りて漸く佳境なるも
6　獨游長慘神　　独り游んで　長に神を慘ましむ
7　待君詩百首　　待つ　君が詩　百首
8　來寫浙西春　　来たって浙西の春を写すを

１２〇回首・簿書二句　睢陽は、南京応天府（今の河南省商丘市）の古称。『太平寰宇記』巻一二（宋州宋城県）に、「漢は睢陽為り、睢水の陽に在るを以て名と為す、地は梁国に属す」とある。幕は、幕府。簿書は、公文書。「李邦直が「旧に感ず」に次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四

冊二五二頁）を参照。二句は、応天府で南京留守簽判の任に在る蘇轍に、蘇軾が思いを馳せるをいう。詩題の注を参照。3○桐柏水　淮水の流れをいう。淮水は、桐柏山（河南省桐柏県）にその源を発する。『尚書』禹貢に、「淮を導くは桐柏自りす」とある。4○庾公塵　東晋の丞相王導が冶城（江蘇省）に在って、武昌（湖北省）で強兵を擁する庾亮を内心おそれ、西風が土埃を立てると扇でさえぎって、「元規（庾亮の字）塵もて人を汚す」といった故事（『晋書』王導伝）。引いて、厭うべき世俗の汚れを広く指していう。5○漸佳境　『世説新語』排調篇に、「顧長康（愷之）　甘蔗を噉らうに、先ず尾を食らう。人　所以を問えば、云う、「漸く佳境に至る」と」とある。8○浙西　杭州を含む、今の浙江省の浙江以西の地域。湖州もこれに含まれる。「毛令・方尉と西菩寺に遊ぶ　二首」その一の注（『蘇東坡詩集』第三冊三七〇頁）を参照。○写　描写する。「文与可の「洋川の園池　三十首」に和す、渓光亭」詩に、「渓光は古自り人の画く無し、新詩に憑仗して与に写し成す」とある。その詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊四七頁）を参照。

睢水の北にある幕府（応天府）の方を振り返って思うのは、君が高々と積まれた書類の山に埋もれて、執務に追われているのだろうということ。いつか桐柏山より流れ出るこの淮水の水で、かの庾亮のような俗物がまきちらす都の塵を洗い流したいものだ

ここから先はだんだんと風景の美しい境界に入っていくというのに、ひとりぼっちではすっと心がふさがりっぱなしだ。君がこちらへ来て、すばらしい浙西の春をうたった詩をたくさん詠んでくれるのが待ち遠しい。

○九五二（施一六―三七）

余去金山五年而復至次舊詩韻贈寶覺長老

余　金山を去って五年にして復た至る。旧詩の韻を次ぎて宝覚長老に贈る

1　誰能斗酒博西涼　　誰か能く　斗酒　西涼に博う
2　但愛齋廚法豉香　　但だ斎廚法豉の香を愛す
3　舊事眞成一夢過　　旧事　真に一夢の過ぐるを成す
4　高談爲洗五年忙　　高談　為に五年の忙を洗う

5　清風偶與山阿曲　　清風　偶たま山阿と曲がれり
6　明月聊隨屋角方　　明月　聊か屋角に随いて方なり
7　稽首願師憐久客　　稽首す　願わくは　師　久客を
　　憐れんで
8　直將歸路指茫茫　　直に帰路を将て茫茫たるに指せ

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。任地の湖州（浙江省）に向かう途上、金山（江蘇省）にての作。

○金山　潤州（江蘇省鎮江市）附近の長江中にあった島の名で、南朝のとき金山寺が開かれた。熙寧四年（一〇七一）、蘇軾は杭州通判として任地の杭州（浙江省）に赴く途上、初めてこの金山寺を訪い、「金山寺に遊ぶ」詩（『蘇東坡詩集』第二冊一六三頁）を作った。その詩の注を参照。○五年而復至　熙寧七年（一〇七四）、ふたたび金山寺に到った蘇軾は、「金山の宝覚・円通の二長老に留別す」（『蘇東坡詩集』第三冊二七二頁）を作っている。これが詩題にいう「旧詩」で、その韻は下平七陽（韻字は涼・香・忙・方・茫）、作られたのはこの時からちょうど五年前にあたる。○宝覚長老　伝未詳。長老は、住持の敬称。上記の詩のほか、「金山寺にて柳子玉と飲みて大醉し、宝覚の禪榻に臥す。夜分に方めて醒め、其の壁に書す」詩（『蘇東坡詩集』第三冊二五〇頁）にもその名がみえる。

1○誰能一句　後漢の孟佗が、宦者の張譲に賄賂として葡萄酒一斗をおくり、それによって涼州刺史の地位を得た故事（『後漢書』張譲伝に引く『三輔決録』の注）をふまえる。「劉長安が薛周の逸老亭に題するに和す。……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊二五七頁）を参照。2○但愛一句　施注は、「金山の法もて豆豉を製するは、他処及ぶ莫し。山僧毎に小罌を以て遠客に餽遺す」（餽遺は饋遺に同じく、贈ること）という。豆豉は、豆類を発酵させて作る食品で、味噌の類。紹聖四年（一〇九七）、恵州で書かれた書簡「王敏仲に与う　十八首」その十三（『蘇軾文集』巻五六）のなかで、蘇軾は「瘴を治するには、止だ薑・葱・豉を用て濃やかに煮て熱きをば呷うのみ、効かざる者無し。而して土人は豉を作るを知らず。又た此の州に黒豆無きも五羊（広州）には頗る之れ有りと聞く。便ち乞いて為に三碩（三石）を致さば、為に豉を作りて、飲疾を散ずる者を得ん」という。この場合の「豉」も、豆類で作った調味料であろう。

以上の二句について瑞渓周鳳は、「涼州ヲ以テ斗酒ニ博ウルガ如キハ、則チ酒ヲ愛スルノ至レルナリ。然レドモ今、酒ハ貴ブニ足ラズ。唯ダ古自リ法製ヲ以テ造ル所ノ豆豉ヲ愛スルナリ」（『四河入海』巻一五の二）と説く。4○高談　談の字を譚に作るテキストもあるが、合注に従う。○五年　詩題の注を参照。5○偶　今ちょうど。おりしも。○山阿　山の隈（入りくんだところ）。6○屋角　建物の屋根の角張ったところ。以上の二句について一韓智翃は、「清風モ、此ノ金山ノ曲（ガリ）タル処デハ、風モメグリテ吹（ク）ゾ。サテ金山ノ庭ノ月影ハ、ヘイヤツイヂノ角ノ辺デハ、四方ニアルゾ。此（ノ）二句ハ、目前ノ景ヲ云（ヒ）テ、サテ底心ハ、宝覚長老ノ応機接物ヲ云（フ）ゾ。上根ノ者ニハ最上乗ヲ説キ、下根ノ者ニハ最下ノ法ヲ説（イ）テ、其（レ）ゾレニ随（ヒ）テ説法スルコト、月ノ屋角ニ随（ヒ）テ方ニ影ヲ写シ、風ノ山阿ノ曲（ガレル）トツレテメグレルガ如（ク）ナド云（フ）心ゾ」と記す。7○稽首　頭をしばらく地面につけている非常に重い敬礼。○久客　長らく旅路にある旅人。杜甫「田父の泥飲して厳中丞を美するに遭う」詩（『杜詩詳注』巻一一）に、「久客　人情を惜しむ、如何ぞ隣叟を拒まん」とある。次の8句、および蘇軾が五年前に詠じた「金山の宝覚・円通の二長老に留別す」（詩題の注を参照）の結び、「風流の二老　長く還往するも、我を顧みるに　帰期　尚お渺茫たり」を考えれば、この「久客」には「ずっと迷っている自分」のニュアンスがあるように思われる。8○直　ずばりと。○茫茫　広々として果てしないさま。

涼州知事の地位を一斗の酒と引きかえにする気などさらさらない。私が愛してやまないのは、ただお寺の厨房特製の豆味噌の香りだけ。思えば往事はまことに過ぎ去りし一場の夢、今こうして清らかに語らえば、積もった五年分の煩労がきれいに洗い去られる。

入りくんだ山の隈をつたってさわやかな風が吹きつける今このとき、月の光が屋根を照らして角張った影を地上に落としている。老師よ、できることなら久しく旅路にさまようこの私を憐れんで、果てしなく広がるこの世界のなか、帰るべき道をずばりと示してはくれますまいか。

○九五四～○九五六（施一六―三八～四○）

遊惠山并敘

恵山に遊ぶ　并びに叙

余昔爲錢塘倅、往來無錫、未嘗不至惠山、既去五年、復爲湖州、與高郵秦太虛・杭僧參寥同至、覽唐處士王武陵・竇羣・朱宿所賦詩、愛其語清簡、蕭然有出塵之姿、追用其韻、各賦三首、

余　昔　錢塘の倅為りしとき、無錫に往来して、未だ嘗て恵山に至らずんばあらず。既に去りて五年、復た湖州を為む。高郵の秦太虛・杭の僧参寥と同に至り、唐の処士王武陵・竇群・朱宿が賦する所の詩を覧て、其の語の清簡にして、蕭然として出塵の姿有るを愛す。其の韻を追い用いて、各おの三首を賦す。

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。任地の湖州（浙江省）に向かう途上、恵山（江蘇省）にての作。

○恵山　無錫県（江蘇省）の西にある山。「焦千之　恵山泉の詩を求む」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三〇三頁）を参照。○錢塘倅　熙寧四年（一〇七一）から熙寧七年（一〇七四）まで、蘇軾は杭州通判の任に在った。錢塘は、ここでは杭州の古称。○往来無錫云々　例えば、「恵山にて錢道人に謁して、小龍団を烹、絶頂に登って太湖を望む」詩（『蘇東坡詩集』第三冊二〇七頁）などが、その当時に作られている。○秦太虛　秦観（一〇四九―一一〇〇）のこと。太虛はその字だが、のち少游と改めた。高郵（山西省）の人。「秦観秀才が贈らるるに次韻す。……」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五九二頁）を参照。○参寥　道潛（一〇四三―？）のこと。参寥はその字。於潛（浙江省）の人（於潛県は当時の杭州に属する）。「僧潛が贈らるるに次韻す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊五六七頁）を参照。○処士　出仕していない人物。○王武陵　字は晦伯。太原（山西省）の人。尚書郎に至った。『全唐詩』巻二七五に「慧山に宿す」詩を収める。その序文によれば、王武陵たちが恵山に宿したのは、貞元四年（七八八）秋八月のこと。○竇群　字は丹列。扶風（陝西省）の人。武元衡らに用いられ、唐州刺史、吏部郎中などを歴任した。『新唐書』巻一七五に伝が

ある。『全唐詩』巻二七一に、「王晦伯・朱遐景と同に慧山寺に宿す」詩を収める。その原注に引く『毘陵志』に、この三人が貞元四年に慧山寺に宿して詩を壁に題したこと、王武陵の死後にその地を再訪した竇群が、詩の後に跋文を付し、その経緯が李蘧（竇群のおい。『全唐文』巻七四六に「恵山寺の記」を収める）により石に刻まれたことなどがみえる。○朱宿　字は遐景。呉郡（江蘇省）の人。拾遺を務めた。『全唐詩』巻二七五に「慧山寺に宿す」詩を収める。○姿　資に通ずる。その人の本質。持ち味。姿質。

私がむかし銭塘（杭州）通判の任に在ったとき、無錫に行き来する際には、必ず恵山まで足を延ばした。その地を去ってより五年を経て、また（近くの）湖州を治めることになった。そこで高郵の秦太虚、杭州の僧参寥とともに恵山に足を運び、当時は処士であった唐の王武陵、竇群、朱宿らが賦した詩を眼にしたところ、そのことばが清々しくさっぱりとしており、もの静かで出世間の味わいがあるのが気に入った。そこで彼ら三人の詩の韻をそれぞれ追い用いて、凡て三首を賦した。

○九五四（施一六―三八）

その一

1 夢裏五年過
2 覺來雙鬢蒼
3 還將塵土足
4 一步漪瀾堂
5 俯窺松桂影
6 仰見鴻鶴翔
7 炯然肝肺閒
8 已作冰玉光
9 虛明中有色
10 清淨自生香
11 還從世俗去
12 永與世俗忘

夢裏　五年　過ぎ
覚め来たれば　双鬢　蒼たり
還た塵土の足を将て
一たび漪瀾堂に歩む
俯して松桂の影を窺い
仰いで鴻鶴の翔くるを見る
炯然たり　肝肺の間
已に氷玉の光を作す
虛明　中に色有り
清浄　自ら香を生ず
還た世俗に従って去り
永く世俗と忘れん

○この詩は、王武陵「慧山に宿す」詩（『全唐詩』巻二七五）に次韻したもの。詩題の注を参照。

1○五年　この当時から五年前まで、蘇軾は杭州通判の任

に在った。詩題の注を参照。4〇漪瀾堂　王注（趙次公）は、「寺中の堂名なり」といい、査注は、朱昱『毘陵志』を引いて、「漪瀾堂は、恵山第二泉の上に在り」という。『方輿勝覧』巻四「常州」堂亭「漪瀾堂」の条に、「慧山に在り」とあって、蘇軾のこの詩（4句）を引く。7 8〇炯然・已作二句　炯然は、光りかがやくさま。一韓智翃は、「我レ此ニ来テ、境地景物ヲ見（ル）則（ン）バ、胸中モ清（ク）ナリテ、雪ヤ氷ノ如（ク）ニナルゾ」と記す（『四河入海』巻二三の二）。9〇虚明　透きとおった明るさ。陶淵明「辛丑の歳七月、赴仮して江陵に還らんとして、夜、塗口を行く」詩（『陶淵明集』巻三）に、「涼風　将に夕べならんとするに起こり、夜景　虚明を湛う」とある。11〇還従一句　ここでは、「世俗に再び帰ってゆく」意に解した（『四河入海』も、かく解する）。ただし、詩題に「出塵の姿」とあること、この詩が後の二首に続くこと、「従」が次の句の「与」（助字）と対であることなどを考慮すれば、「世俗従り去り」と読むべきかもしれない。

夢の中で五年の歳月が流れて、目覚めてみれば白髪が増した頭は灰色になっていた。それでも繰り返し塵や埃にまみれてしまった足で、やっとまた漪瀾堂を歩むことができる。

（漪瀾堂から）見おろせば時を経て伸び茂った古木の影が小暗く、見上げれば鴻や鶴が飛びゆくさまが眼にはいる。そんな中に在ると身体のなかがきらきらとして、氷雪の輝きを放つように思える。透明な我が身の姿がだんだんと見えてきて、汚れのない存在である本来の自分が感じられる。

これからもまた世俗にかえっていくことにはなるけれど、ずっと世俗には染まらずにいたいものだ。

〇九五五（施一六―三九）
その二

1　薄雲不遮山　　薄雲　山を遮らず
2　疎雨不濕人　　疎雨　人を湿さず
3　蕭蕭松徑滑　　蕭蕭　松径滑らかに
4　策策芒鞋新　　策策　芒鞋新たなり

5　嘉我二三子　　嘉す　我が二三子の
6　皎然無淄磷　　皎然として淄磷無きを
7　勝遊豈殊昔　　勝遊　豈に昔に殊ならんや
8　清句仍絶塵　　清句　絶塵に仍る
9　弔古泣舊史　　古を弔いて旧史に泣き
10　疾讒歌小旻　　讒を疾んで小旻を歌う
11　哀哉扶風子　　哀しい哉　扶風子
12　難與巢許隣*　　巣許と隣すること難し

〔原注〕　謂竇羣（竇群を謂う）

○この詩は、竇群「王晦伯・朱遐景と同に慧山寺に宿す」詩（『全唐詩』巻二七一）に次韻したもの。詩題の注を参照。3○蕭蕭　風や雨の音のものさびしいさま。4○策策　木の葉や落ち葉などが立てる音のさま。ここではワラジが草や落葉を踏む音で、心弾む感じを込める。白居易「秋月」詩（『白居易集箋校』巻九）に、「落葉　声　策策たり、鶩烏　影　翩翩たり」とある。○芒鞋　ワラジのこと。草鞋に同じ。5○二三子　このとき蘇軾に同行した秦観、道潜らをさす。『論語』陽貨篇に、「二三子よ、偃の言　是なり」とあるように、呼びかけにも用いられる。「常山の絶頂の広麗亭に登る」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊九六頁）を参照。6○皎然　白く明らかなさま。○淄磷　磷緇（磷淄）に同じ。この句は磷の字で押韻する。磷は、黒ずむ意、緇（淄）は、うすくなる意で、世俗の影響により悪くなることをいう。『論語』陽貨篇に、「堅しと曰わざらんや、磨すれども磷がず。白しと曰わざらんや、涅すれども緇まず」（『史記』孔子世家では、緇の字を淄に作る）とある。7○勝遊　名勝を遊覧すること。韓愈「祖席（秋字を得たり）」詩（『韓昌黎集』巻十）に、「宜春を以て遠しとする莫かれ、江山　勝遊多し」とある。○昔　王武陵・竇群・朱宿の三人が恵山に遊んだ時のこと。詩題の注を参照。9 10○弔古・疾讒二句　讒は、讒言のこと。小旻は、『詩経』小雅（節南山之什）の篇名。その小序に、「小旻は、大夫　幽王を刺るなり」とあり、周の幽王が小人の言に惑わされて、政道を誤っていることをそしる詩であるとする。この二句には蘇軾の心の波立ちのようなものが感じられるが、あるいは新法党側の何らかの態度を意識するかとも思える。11 12○哀哉・難与二句　扶風子は、原注にあるように竇群のこ

と。竇群は初め毘陵に隠棲していたが、徵せられて仕えた。『旧唐書』竇群伝に、「竇群、字は丹列、扶風平陵の人なり。……群が兄の常・牟、弟の鞏は、皆な進士の第に登るも、唯だ群のみ独り処士為り、毘陵に隠居し、節操を以て聞こゆ。……徵せられて左拾遺を拝し、侍御史に遷る」とある。巣許は、堯の頃の二人の隠士である巣父と許由のこと。箕山に隠れ住んでいた許由は、堯に九州の長を務めるよう言われると、耳が汚れたと言って潁水の水で耳を洗った。巣父は連れた牛にたまたま水を飲ませようとしていたが、許由にその話を聞くと、汚れた水は牛に飲ませられないと言ってその場を去ったという（晉・皇甫謐『高士伝』巻上）。

うっすらと浮かぶ雲は山をおおい隠すことなく、しとしとと降る小ぬか雨は人を濡らさない。松林が風にさびしげに鳴るなか小径は湿り気を含み、足を運べばワラジがサクサクと軽やかな音をたてる。

嬉しいことに私に連れ立つともがらは、世俗の塵に染まることなく、その心は清らかでけがれがない。この度の遊覧の楽しみは唐の先人たちさながらに、詩を詠んでもその涼やかな詩句は俗世を脱している。

いにしえの事どもを記した書物をひもといて涙を流し、讒言をにくんで「小旻」のうたをうたう。哀しいことに扶風のひと竇群は、巣父や許由の道を歩めなかったのだ。

○九五六（施一六―四○）

その三

1 敲火發山泉
2 烹茶避林樾
3 明窗傾紫盞
4 色味兩奇絶
5 吾生眠食耳
6 一飽萬想滅
7 頗笑玉川子
8 飢弄三百月
9 豈如山中人
10 睡起山花發
11 一甌誰與共

火を敲ちて山泉を発し
茶を烹て林樾に避く
明窓　紫盞を傾く
色味　両つながら奇絶
吾が生は眠食耳
一飽して　万想滅す
頗る笑う　玉川子が
飢えて三百月を弄するを
豈に如かんや　山中の人の
睡起　山花発くとき
一甌　誰と共にせん

12　門外無來轍　　門外　来轍無し

○この詩は、朱宿「慧山寺に宿す」詩（『全唐詩』巻二七五）に次韻したもの。詩題の注を参照。

1○敲火　火打ち石を打って火をおこす。韓愈「石鼓歌」（『韓昌黎集』巻五）に、「牧童　火を敲ちて　牛　角を厲く、誰か復た手を著けて為に摩挲せん」とある。2○避林樾　樾は、木かげ。木の下。『広韻』入声十月「樾」に、「樹陰なり」とある。避は、喧騒を避ける意。3○紫盞　盞は、茶碗のこと。蔡襄『茶録』下編「茶盞」に、「茶の色は白なれば、黒盞に宜し……他処（建安以外の地）に出ずる者は、或いは薄く色は紫にして、皆な及ばざるなり」とある。78○頗笑・飢弄二句　玉川子は、唐・盧仝の号。盧仝「筆を走らせて孟諫議が新茶を寄するに謝す」詩（『玉川子詩集』巻二）に、「緘を開けば宛も諫議が面を見るがごとし、手ずから閲す　月団三百片」とある。11○甌　ほとぎ。かめ（瓶）。12○門外一句　『漢書』陳平伝に、「家は乃ち負郭の窮巷にして、席を以て門と為す。然れども門外に長者の車轍多し」とある。また、陶淵明「飲酒　二十首」その五（『陶淵明集』巻三）に、「廬を結んで人境に在り、而も車馬の喧しき無し」とある。

火をおこして山泉の水をわかし、茶を煮て木陰で静かに憩う。光のさす窓辺で紫碗を傾けて喫する茶は、見目、味わいともにこの上ない。

我が人生は飲食と睡眠がすべてで、じゅうぶん食べて眠りさえすれば、すべての煩いは消えてしまう。なんとも可笑しいのは、玉川子（盧仝）が、腹を空かせながら三百もの団茶をめでたこと。それよりはこの山中の人の方がよっぽどましだ。眠りから覚めれば山には花が咲いているのだから。

気兼ねすることなく花々と一服の茶を楽しもう。門外には訪ねてくる客の車轍もないから。

○九五七（施一六―四一）

贈恵山僧恵表

恵山の僧　恵表に贈る

1　行遍天涯意未闌　　行くこと天涯に遍くして　意未だ闌きず

2　將心到處遣人安　　心を将て　到る処　人をして安んぜしむ

3　山中老宿依然在　　山中の老宿　依然として在り

4　案上楞厳已不看　　案上の楞厳　已に看ず

5　欹枕落花餘幾片　　枕を欹つれば　落花　幾片をか余す

6　閉門新竹自千竿　　門を閉づれば　新竹　自ら千竿

7　客來茶罷空無有　　客来たれども茶罷んで空にして有ること無し

8　盧橘楊梅尚帶酸　　盧橘　楊梅　尚お酸を帯ぶ

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。任地の湖州（浙江省）に向かう途上、恵山（江蘇省）にての作。

○恵山　本注解に収める、「恵山に遊ぶ　幷びに叙」詩の詩題の注を参照。○恵表　伝未詳。

1 2○行遍・將心二句　二句は、恵表が若い頃から雲水の如く各地を行脚し、民衆を仏に帰依せしめ、安心（仏教で、信仰によって心を安らかにし、心を動かされないこと）の境に導いたことをいう。『景徳伝燈録』巻三、菩提達磨の条に、達摩と慧可大師との以下の問答を記す。「光（慧可の名）曰く、「我が心未だ寧からず。乞う　師　与に安んぜよ」と。師曰く、「心を將ちて来たれ。汝が与に安んぜん」と。曰く、「心を覓むるも了に得可からず」と。師曰く、「我れ汝が与に安心し竟んぬ」と」。3○老宿　修行を積んだ老僧のこと。恵表をさす。杜甫「岳麓山道林二寺行」（『杜詩詳注』巻二二）に、「老宿に依止するも亦た未だ晩からず、富貴　功名　焉くんぞ図るに足らんや」とある。4○楞厳仏典『楞厳経』のこと。『首楞厳経』とも称する。中国撰述の経典とされるが、宋代には『円覚経』とともに広く読まれた。一韓智翊は、「サテ先ニ来タ時ハ、楞厳ガ案上ニアリタガ、今ハナイゾ。ナゼニト云ヘバ、這道ガ元来、文字ノ上ニナイ程ニゾ。自己ヲ見得シテハ、更ニイラヌモノナルホドニ、文字ヲバ略シテ見ザルゾ」（『四河入海』巻一五の二）と記す。5 6○欹枕・閉門二句　欹枕は、枕をして横たわること。眠りから目覚めたときや、寝つかれぬと

きなどに用いられる語。「七月二十四日、久しく雨ふらざるを以て、出でて磻溪に禱る……」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊四五六頁）を参照。二句は蘇軾が投宿してからのことで、寺に一泊して朝に目覚め、門を閉じた境内のようすについて述べる。7〇空無有　蘇軾は茶を喫するのみで、寺には食べるものが何もないことをいう。一韓智翊は、「客ハ、坡自ラ云（フ）ゾ。言（フココロ）ハ、我レ表師ノ処へ来テアルガ、ナンデモアレ、一塵ノ食物モナイゾ」と記す。8〇盧橘楊梅　盧橘は、ビワ。楊梅は、ヤマモモ。『蘇軾詩注解（四）』に収める作品番号一六二八の詩の注を参照。帯酸は、ビワもヤマモモも実がまだ熟さず酸っぱい意。実が熟するを待って再訪せんとのニュアンスを込めていよう。

天の果てまで雲水のごとく歩かれても、旅への意欲は尽きることがなく、行く先々で人々の心を安らかにすることをと願いつづけておられた。そしてこの恵山には今も変わらず老師はご健在だが、机の上の『楞厳経』をお読みになることはもうない

目覚めては頭を枕にのせて寝そべったまま、窓外の春の花はどれほど残っていようかと思いを馳せる。門を閉ざした境内には、若竹が千本も生え育っている。寺に客が来て茶を喫し終わっても、他に口にするものは何もなく、春の木々にはまだ熟さぬ酸っぱいビワとヤマモモが成っているだけだ。

〇九五八（施一六―四二）

贈錢道人

錢道人に贈る

1　書生苦信書　　書生　苦だ書を信じ
2　世事仍臆度　　世事　仍りに臆度す
3　不量力所負　　力の負う所を量らずして
4　輕出千鈞諾　　軽がるしく千鈞の諾を出だす
5　當時一快意　　当時　一に意を快くすれども
6　事過有餘怍　　事過ぎて余怍有り
7　不知幾州鐵　　知らず　幾州の鉄もて
8　鑄此一大錯　　此の一大錯を鋳る

9　我生涉憂患　　我が生　憂患に渉る
10　常恐長罪悪　　常に罪悪を長ぜんことを恐る
11　靜觀殊可喜　　静観　殊に喜ぶ可し
12　脚淺猶容却　　脚浅くして猶お却くことを容す
13　而況錢夫子　　而るを況んや錢夫子
14　萬事初不作　　万事　初めより作さざるをや
15　相逢更何言　　相逢いて更に何をか言わん
16　無病亦無藥　　病も無く　亦た薬も無し

元豊二年（一〇七九）、四十四歳の作。任地の湖州（浙江省）に向かう途上、恵山（江蘇省）にての作。

○錢道人　錢顗（字は安道）の弟で、恵山山人とも称し、故郷である無錫（江蘇省）の恵山に隠棲していた。蘇軾は、杭州通判の任に在った熙寧六年（一〇七三）に、錢道人を訪うている。「恵山にて錢道人に謁して、小龍団を烹、絶頂に登って太湖を望む」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊二〇七頁）を参照。錢顗については熙寧五年（一〇七二）の作、「秀州に至りて、錢端公安道に贈り、兼ねて其の弟恵山山人に寄す」（端公は侍御史の別称）詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊四四六頁）を参照。

2○臆度　自分の考えだけによって推しはかる。陳子昂「曹仁師の軍を出すを諫むる書」（『陳伯玉文集』巻九）に、「且つ古来絶漠には、多く士馬を喪う、臣の臆度するに非ず、輒ち敢えて陳聞せん」とある。4○千鈞諾　非常な重みのある承諾（一鈞は三十斤）。『史記』季布伝に、「黄金百斤を得るは、季布の一諾を得るに如かず」とある。5○快意心を楽しませる。心地よいこと。『史記』李斯伝に、「是くの若きは何ぞや。意を当前に快くし、観に適えばなる而の已」とある。6○怍　はじる。自分の失敗などを恥じて赤面すること。8○鑄此一句　唐末、魏博（今の河北省邯鄲市一帯）節度使羅弘信の子の羅紹威は、父の後を継いで同節度使となったが、牙軍（藩鎮の擁する軍団）の起こした反乱によって出奔した。羅紹威は宣武（今の河南省開封市一帯）節度使であった朱温（のちの後梁の太祖）に助けを求め、これと共謀して牙軍を滅ぼしたが、多くの軍糧と金銭を費やしたため、以後魏博は衰え、朱温の勢力下に入るを余儀なくされた。羅紹威は、「六州四十三県の鉄を聚めて、一箇の錯を打ちて成さず」と嘆いた（『北夢瑣言』巻一四・

『続世説』巻七）。錯は、やすり（鑢）と錯誤の意をかけており、後に「大錯を鋳成す」（重大な過ちを仕出かす）という成語となった。なお、この「大錯」に関連して、万里集九は『宋元通鑑』を引き、熙寧八年（一〇七五）に宰相に復職した王安石が、翌年には息子の死などを理由に辞職したこと、元豊二年（一〇七九）に蘇軾らを讒訴した新法党の蔡確らが、その行為や政策への批判を顧みず、政治姿勢を一向に改めなかったことなどに言及する。その当否はともかく、ここまでの八句には何らかの含むところがあるように思える。9〇憂患　なやみや苦痛。また、それらの多い生活のこと。『孟子』告子下篇に、「憂患に生きて安楽に死することを知る」とある。11〇静観　心静かに観察する。観の字は、考える意を含む（静の字を浄に作るテキストがあるが、取らない）。程顥「秋日偶成　二首」その二（『全宋詩』巻七一五）に、「万物　静観すれば　皆な自得、四時の佳興　人と同じ」とある。13 14〇而況・万事二句　一韓智翊は、「此（ノ）人ノ上ニハ、退（ク）コトノ易（シ）ト云（フ）コトモナイゾ。初（メ）ヨリ世路ヲ踏（マ）ザル程ニゾ」（『四河入海』巻一五の二）と記す。16〇無病一句　『景徳伝燈録』巻三〇に引く杯渡禅師「一鉢歌」に、「離る可き無く、著く可き無し、何れの処にか更に病薬無きを求めん、……薬は是れ病、病は是れ薬、到頭　両事ともに須く拈却すべし。亦た薬無く、亦た病無し、正に是れ　真如　霊覚の性」とある。一韓智翊は、「此（ノ）人、本ヨリ憂患ノ事ナイホドニ、更ニ憂患ヲ治ス可キ薬モナイゾ。譬ヘバ病ガナイ程ニ、薬モ入ラザルガ如キゾ。薬ノアラウズホドハ、病ガナウテハ叶（ハ）ザルゾ。病モナク薬モナイコソヨケレ」と記す。

書生というものは書物を過信し、世事をそれによってのみ推しはかり、おのれの力量を顧みることもなく、軽々しく重大なことを請け負ってしまう。初めのうちは、それでただただ心地よいとしても、事が進んでみるとあまりに恥ずかしいこととなる。どれだけの州に産する鉄を合わせたらできるか分からぬほどの、大きな過ちが鋳造されてしまうのだ。

我が人生には苦悩が絶えることなく、大きな罪を犯してしまうのでは、と常におびえてきた。だが心を落ち着けて

考えてみると、とても喜ばしいことがある。私はまだ世事に足を踏み入れたばかりで、そこから離れることも可能だし、加えて銭先生は、初めから世事には一切かかわらないお方だということだ。その先生にお目にかかるだけで十分、そのうえ何を言うことがあろう。病がなければ、薬も要らないのだから。

〔付記〕本稿は、西岡が原案を作成し、南山読蘇会のメンバーである蔡毅（南山大学名誉教授）、中裕史（南山大学外国語学部教授）、中純子（天理大学国際学部教授）、原田直枝（南山大学総合政策学部教授）の諸氏と共に検討を加えたものである。